形見物

古田　隆子
（広島）

このごろの私

広島の桜の開花は、三月二十五日でした。標本木の桜は期待に胸が高鳴ります。しかし、被爆桜は見舞のような気持で碇神社へ行きます。低木になりましたが花は瑞々しく咲き、生気をもらいます。

雨上がりその気配してあふぎたる東の空に淡き虹立つ
おだやかな春の夕ぐれ不意に子は耐火金庫を処分しようと
八十二のわが終活を長男に先行されて　おつとどつこい
クローゼットの奥に金庫は鎮座する独りのわれの重しのやうに
気象庁の「六百四十度の法則」　けふ広島にさくらろくりん
ヒヨドリの啼きゐる朝の境内に被爆桜はひつそり咲けり
傾きし被爆桜のそのそばで曇るあしたの花あかり浴む
遠き春「願はくは」とぞ諳んじし夫につづきて下句をわれが
モネの空わが春の空たつぷりと白色ふくむ青空あふぐ
香の物切りつつ気づく小き皿二枚ならべてひとりのキッチン
モノトーンのTシャツ送ればサーフィンの好きな三男「全部もらうよ」
夫が長く愛用してゐしスイス製時計を次男は大切に持つ
長男の身丈にぴつたり枯れ色の紬の着物ひと揃ひ出す
「今も歌を詠んでいるか」と過ぎし日の夫の言葉はわれへの形見
ぐんぐんと飛行機雲は伸びてゆく明日から菜種梅雨とふ空に

祖父と酒瓶

桜庭さわね
（鳥取）

このごろの私
町内のカラオケ同好会に入った。歌うのは「ふたりの大阪」「ブルー・ライト・ヨコハマ」など。気分が晴れない時でも歌えばすっきりする。先輩方の歌にまつわる思い出を聞くのも楽しい。

八歳にいくつと訊かれ和やかに父は応へる九十八と
七人の家族支へし父の手をしみじみ見つつ爪を切りやる
遺伝子の旅よどこまで　いとしげにひ孫二歳の背をさする父
病む母が「きれいじゃなあ」と眺めたりいのち極まる山のもみぢ葉
病む母はふかくため息つきながらダム湖の昏き水面を見つむ
昏睡の母まへにして泣く父の背は潰えゆく流木のごと
母逝きてデイサービスを止めし父本音語らずわれも質さず
鳶の待つ畑に鍬うつ農夫にも春の行程動き出したり
鍬を肩に「晩なりました」と行き交ひしときにふくふく土の匂ひき
小刻みに線の引かれし酒瓶と祖父のあごひげ夕餉の卓袱台
焚付けの杉葉（すぎば）を共に拾ひたる友の生家は更地となりぬ
木蓮の白き花びら地に落ちて雨に濡れたる二枚を拾ふ
閉店の貼り紙濡れる美容室　店主の死去を告げざるままに
少女との距離少し置き大人さぶる少年が立つ夕焼けの路地
過去形の恋バナ聞きつつはやしたて二次会楽しカラオケ楽し